

## 市民の手による市域の自然調査の経過

若 宮 崇 令\*

市街化の激しい当市の自然は、失われる動植物、交代するもの等、その変化は年々多彩多様を極めている。このように絶えず変動している自然の、日々年々の連続した調査記録の収集の累積があってこそ、過去を推しはかり未来を見通すことが可能となり、打つべきでたが明確になり、正しい自然保護が行われる。

地域の自然を扱う博物館として、当館の役割は失われたものは置いておき、早急に現在の自然の記録を残すことにある。だが、広範囲な自然調査を館の職員だけで行なうのは、時間的にも無理である。そこで、より多くの市民に参加してもらい、多勢の手で現在の自然の記録を残すと共に、市民の自然・環境への意識の向上を図るため発足したのがこの自然調査である。この調査のボランティアとして応募した市民は56名、これらの人々に①植物班、②こけ・きのこ班、③昆虫班、④水生昆虫班、⑤動物班、⑥野鳥班、⑦地質班の7分野の班に分かれてもらい調査を開始した。調査期間は5年間とし、初年度の昭和58年はボランティアの資質の向上を図るための学習を主体にした予備調査を行なった。昭和59年の第2年度は丘陵部を中心にした調査、第3年度は多摩川河川敷部を中心にした調査、第4年度は沖積地を第5年次は埋立地を中心にした調査を行ない、一応5年間で川崎市全域をカバーできるようにしたい。

次に各班の活動を記す。(詳細は、「市民の手による川崎市域自然調査報告書 昭和58年度」を参照されたい。)

### 〈植物班〉

毎月1回、土曜日の午後集まって生田緑地内の植物の帰化率調査を実施した。群落別に調査したが、全域で見ると帰化率は11.2%だった。昭和41年の調査結果では7.8%と報告されている。

※青少年科学館 主査 学芸員

### 〈こけ・きのこ班〉

大別して3つの予備調査を実施して学習を深めた。①生田緑地、早野聖地公園、黒川地区の蘚苔類調査、②生田緑地、東高根森林公園のきのこ調査、③市域の樹幹着生蘚苔類調査、である。その結果、市内のこけとききのこはそれぞれ30~40種確認された。

### 〈昆虫班〉

東高根森林公園と生田緑地で、自然林および二次林の林床に棲息する昆虫相調査を行ない、その概略を把握した。

### 〈動物班〉

聞き込み調査を主体に実施し、ホウネンエビとカプトエビの大発生する水田を発見した。また、ヒキガエルの産卵場所調査も行なった。

### 〈野鳥班〉

生田緑地、多摩川での野外観察と、室内での学習を通じて野鳥調査の方法と実際を学習した。

### 〈水生昆虫班〉

多摩川登戸水道橋付近の定点採集調査を夏・秋・冬に分けて実施しBI、PIを求めた。

### 〈地質班〉

民家園裏露頭のローム層地質調査を鉤物組成分析を中心として行い、その地質、層序を明らかにした。